子と手と手

岡山発 国際貢献

紛争の地

教育に平和メッセージ

インドネシア・スマトラ島で、バンダアチェの東に位置するランブーイ。津波で家を失った家族がにわか造りのバラックで暮らす。

国際医療ボランティアAMDA（本部・岡山市楢津）はここで、子どものための教育支援プロジェクトを行っている。

子どもたちの歓声が響く集会所のすぐ近く。広場の一角に、崩れた白い壁があった。白い壁に赤いペンキでメッセージが記されていた。

「ACEH PEACE（アチェに平和を）」

ここアチェ州はスマトラ沖地震・津波の最大被災地と同時に、もう一つの顔を持っている。紛争地という顔だ。

独立を求める地元武装組織「自由アチェ運動」（GAM）と国軍との戦いは一九七〇年代半ばから続き、約三十年間に一万五千人以上の犠牲を出した。それが、被災を機に双方が歩み寄り、昨年八月十五日にようやく和平協定が結ばれた。年末にはGAMの武装解除を終えた。今年四月には自治政府設立へ向けた選挙の実施―と、欧州連合（EU）主体の監視団の下、和平プロセスは進む。

紛争の主な背景は地下資源。アチェには天然ガスや石油などが豊富だ。政府主導の開発は、「地元への見返りが少ない」と住民の反発を招き、官僚の賄賂（わいろ）体質も国家不信を助長した。AMDAの現地人スタッフ（三）は言う。「外国から物資、お金などたくさんきているはずなのに、避難所まで十分届いていない。きっと役人がもらってるんだよ」。和平はなっても、国の信頼回復は容易ではない。

現地調査

昨年十一月上旬、現地事業統括の金山夏子（二九）はスタッフ二人を伴って、バンダアチェから約三百キロ南、アチェ・スルタンという村にバスで十六時間かけて実態調査に行った。GAMの潜伏地があったジャングルに囲まれた村だ。

村の子どもたちは、金山らをおびえた目で迎えた。武力衝突の忌まわしい現実を体験しているからだろう。よそ者が来ると悪いことが起きると思っているのだ。

バス停に少女（一五）が立っていた。三人に「バンダアチェまで連れて行って」と話しかけてきた。少女は津波で両親を失った。里親が見つかり、村に連れてこられたがなじめない。祖母のいるバンダアチェに戻りたいという。

紛争と津波。子どもたちの運命を翻弄（ほんろう）し、心に体に、さまざまな影を落としている。金山は解決すべき深刻な課題をまた突きつけられた思いだった。「何とかしたい」

見捨てない

「あなたたちを見捨てないというメッセージを伝えることだ」。緊急救援などで被災地へ入る心構えをAMDA代表菅波茂（五九）は説明する。

AMDAは今、新事業の準備に入っている。テーマは「平和教育」。現在の読み書きなどを主にした教育プロジェクトに民族音楽や舞踊を取り入れ、平和のメッセージを織り込もうというのだ。

金山は「一番必要なものを届けるのが私たちの仕事。今、届けるべきものは平和の大切さ」と力を込める。

もう一つ、平和貢献策がある。

AMDAインドネシア支部が中心となって医療施設「ピースクリニック」をアチェ州に建てようというのだ。現地の若い医師を常駐させ、地域医療を行う。

クリニックは、AMDAが去った後も残るメッセージでもある。「あなたたちを忘れない」と。

（敬称略）

「アチェ　ピース」と書かれた壁。紛争地であったことを物語る＝インドネシア・アチェ州ランブーイ

第1部 われらNGO ―― AMDA ④